

新型コロナウイルスによる臨時休校時の対応を振り返って

学習進路部長 荻野 雄太

2月27日、卒業式を直後に控えた本校は、安倍前総理の全国の学校への臨時休校の要請を、衝撃を持って受け止めた。その後の対応を下表にまとめたが、本校は3月2日に授業動画の配信が始まり、休校期間中に1,000本以上の授業動画を配信して、臨時休校の危機に対処した。茨城県教育委員会の授業配信数調査によると、県立高校全体での授業配信数の約1割を並木中等一校が占める。先の見えない休校というかつてない危機に対し、「生徒の学びを止めない」という信念を持って本校は柔軟に対応することができた。動画を配信するには難しい技術が必要なのではないかと心配したが、わずか一週間の間に知恵を出し合い工夫をこらし、あるもので収録設備を整えていった先生方の積極性とチームワークの良さには大いに感謝している。

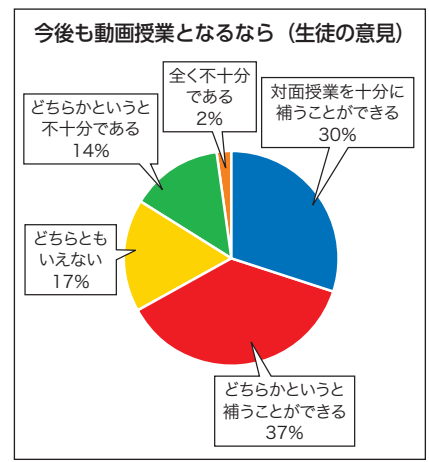
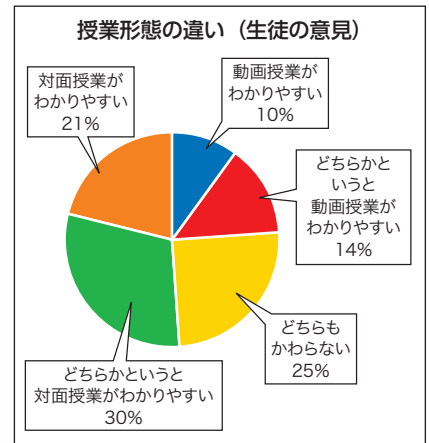
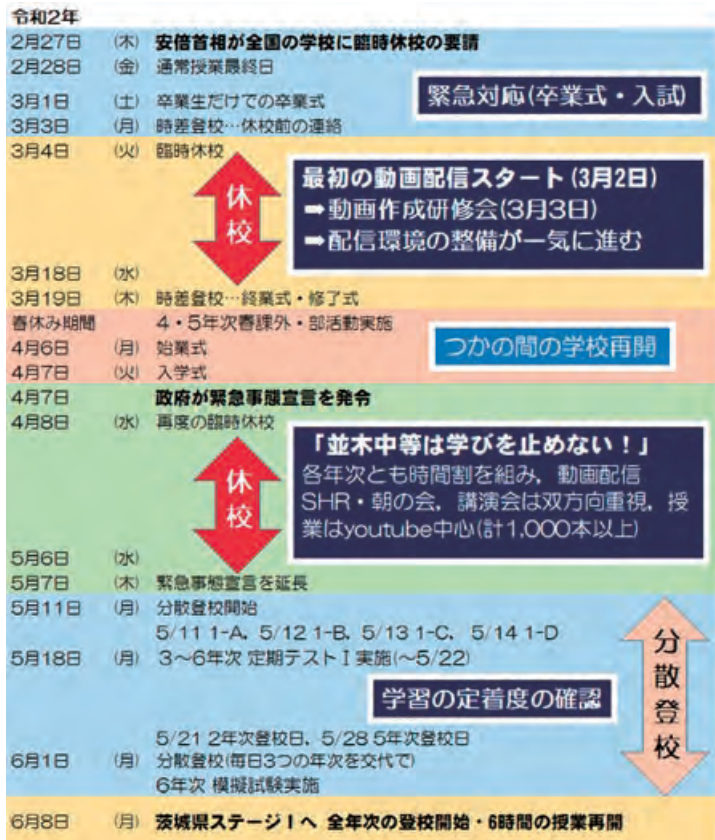
授業動画の収録とともに、年次に一斉連絡する手段の確立が必要となった。本校では教育用SNSのEdmodoやロイロノートで各年次・各教科・各授業で連絡グループを作り、情報発信のプラットフォームとすることに成功した。この情報発信手段の確立もオンライン授業でもとても大切であった。



また、オンライン授業の課題も浮き彫りになった。学習進路部で行ったアンケート結果から、教員からは、動画配信授業では学習の定着度が対面授業と比較して低いことが指摘された。生徒からは、対面授業のほうがわかりやすいという意見が過半数を占めた。総じてはやはり対面授業が学習の中心であり、補完的役割として動画授業は良いということが、生徒と先生の意見の両方から読み取れる。

学校としての休校期間の生徒への対応の特徴として、前期課程は電話での直接の生徒の様子把握や、双方向での学活など、生活面での支援を意識した対応に重きが置かれた。後期課程では学習面での進度を優先し、授業動画配信を多めに行う対応が見られ、6年間の成長過程に合わせたきめ細やかな教育を実施することができた。

教室での対面授業が授業の基本であるが、現在も動画配信を続けている講座もある。今後は再度の休校の可能性にも備え、学校は配信環境の整備やオンライン授業の質の向上を、家庭では受信環境の整備をそれぞれの立場で協力し合い、より良いものになるよう進めていく必要があると痛感した。



編集後記

「つばさ」を発行・編集するにあたりご協力頂いた、大久保写真館様・佐藤印刷様・幕内先生にはお忙しい中、ご尽力頂き大変感謝しております。

コロナ禍による前例のない状況で不安もありましたが、編集を進める中で、生徒たちの笑顔の写真から大きなパワーをもらいました。良い仲間にも恵まれ、無事に編集を終えることが出来ました。ありがとうございました。